

(5) チホクコムギ

－もち肌美人で欠点ばかり・でも8.6万ha－

秋まき小麦「チホクコムギ」は、1969年北海道立北見農業試験場小麦育種指定試験地で、「北見18号」×「北見19号」のF1を母、「北系320」を父として交配を行い、以後系統育種法によって、選抜固定を図ったものです。当初は「北見18号」のパン適性と、「北見19号」の多収性、「北系320」の強稈性を結合する目的で取り組まれましたが、途中からめん適性の選抜に目標を変更しています。1981年に新品種「小麦農林126号」として登録され、「チホクコムギ」と命名されました。

本品種は「ホロシリコムギ」並の中生種で、稈質は強剛で耐倒伏性は強く、多収であり、特に多肥密植栽培に向きます。千粒重はやや小さく、豊満で外観品質は「ホロシリコムギ」より優れます。軟質種に属し、粉灰分が少なく、製粉性は優れ、粉は白く、蛋白含量はやや少ないです。めん適性は、きわめて優れる特徴を持ち、特に粘弾性が優れています。うどんこ病や赤かび病に弱く、耐穂発芽性も弱いです。しかし成熟期からの粒水分の乾減率が早く、成熟期後早期に収穫が可能です。耐雪性、すなわち雪腐病に弱いので、当初の栽培地域は、十勝と網走の雪の少ない地帯に限定されました。

北海道の小麦作付面積は、1977年から急速に増大しています。それまで2～3万haでしかなかった作付面積は、一挙に10万haにまでに膨れ上がり、日本の小麦に占めるウエートが高くなりました。この時期に登場したのが「ホロシリコムギ」で、強稈性が優れ、多肥密植が可能となり、大型機械化にうまくマッチし、北海道の小麦収量は飛躍的に上がりました。しかし「ホロシリコムギ」は残念ながら、品質特にめんの適性が欠けていたため、実需者からは、めん適性の優れる品種の開発が強く望まれました。そこで登場したのが「チホクコムギ」です。「チホクコムギ」は、日本の品種の中で、はじめてアミロース含量の少ない品種として登場したもので、きわめて優れるでんぷん糊化特性を有します。めんに使われる小麦としては、ASWという優れものの輸入小麦銘柄がありますが、「チホクコムギ」の食感はそれに匹敵します。「チホクコムギ」で作っためんは、表面がなめらかで、しんがしっか

りしたモチモチ感もち、非常においしいのです。残念ながらASWに比較しますと、「チホクコムギ」の粉色では、くすみがあり、見劣りします。

「チホクコムギ」は、「ホロシリコムギ」に比較して耐雪性、うどんこ病、赤かび病耐病性が劣るなど、多くの欠点を抱えていましたが、素晴らしい品質を有していましたので、北海道の小麦のイメージを一新するとして期待されました。しかし、多くの欠点があるため、小麦関係者や病害虫関係者などから、品種にする・しないと大論議をしたものです。そのため、栽培・普及が定着するには多くの時間を要しました。十勝のある大面積をもつ農協の指導者は、「こんな欠点の多い品種をわが組合員に普及することはできない」と、2年間普及を見合わせました。このようなことから、当時の北見農試場長は、「チホクコムギ」の特性に応じた栽培法」のマニュアルを専門技術員に命じて、徹底的な指導をするようにしたのです。そのほか、当初道央の多雪地帯は普及地帯でなかったため、耐雪性の弱点を補う早期は種や、秋の適正窒素施肥量の検討がなされ、登熟期に多湿の十勝では、うどんこ病や赤かび病の防除の徹底等が検討されました。また、穂発芽にも弱かったので、いかに早く収穫するかも検討されました。このように欠点の多い「チホクコムギ」も、適期は種、防除の徹底、窒素の分追肥、は種量の軽減、早期収穫など多くの栽培技術を徹底することによって、普及をはじめて7年後の1988年から、「ホロシリコムギ」に替わって、7.3万haと主役を占めるに至り、1992年には、8.6万haと最高の作付面積を記録しました。以降「チホクコムギ」の品質特性と、小麦関係者の小麦への力入れのおかげで、道産小麦は、日本で最高の評価を受けるまでに成長しました。

また、「チホクコムギ」は、受光態勢のよい草型をし、従来の品種に比較して転流効率も優れます。多収の「チホクコムギ」が選抜された背景は、必ずしも明らかになっていることではありませんが、ドリル栽培の多肥密植条件で、生産力試験を繰り返した結果、選ばれたと考えられます。「チホクコムギ」の生産力試験では、きわめて高収の800kg/10a、900kg/10a、北見農試の坪刈り試験で1トン/10aの収量成績もみられました。農家栽培では、「チホクコムギ」になってから、700kg/10aや800kg/10aの高い単収も散見されましたし、品質の陰で目立ちませんが、多収性でも貢献した品種といえ

ます。

<天野 洋一>



成熟前のチホクコムギ（左）とホロシリコムギ（右）